いまもあしたも誇れる座間であるために…

発行者：おぎはら健司
発行元：座間市相模が丘3-24-2-203
連絡先：046-204-5911（ﾌｧｯｸｽも同じ）

おぎはら健司の市政リポート

行政視察が続きました！

２月８日に続いて先週末も予期せぬ大雪に見舞われ、座間市内でも転倒によるケガ人や冠雪による道路の通行止めが相次ぎました。こうした自然災害に強い町づくり施策についても考えて参りたいと思います。

さて、１月２８日の『座間市基地返還等促進協議会』の習志野駐屯地視察に始まり、２月５日・６日には所属する会派「新政いさま」による千葉県船橋市と柏市の視察。更に2月１０日には市議会基地対策特別委員会で福生市にあります在日米空軍横田基地と、視察が続きました。

さて、それらの視察を座間市政に反映させてこそ意義のある視察となりますが、今号では陸上自衛隊習志野駐屯地と在日米空軍横田基地の視察について触れたいと思いますが、それぞれの視察を通じて強く感じた事は、有事の際には平時の訓練がとても重要という点です。

日本が誇る自衛隊

習志野駐屯地では、昨年3月２６日に陸上自衛隊の再編があり、朝霞駐屯地から座間分頓地へ中央即応集団司令部が移駐され座間駐屯地となりましたが、その隷下部隊である第一空挺団の視察を行いました。いわゆる「エリート集団」である第一空挺団の任務は主に国際貢献だそうですが、驚いたのはその訓練内容と『精鋭無比』という言葉に表現される誇りです。まさに「自分たちの他に精鋭はいない」というだけあって、説明頂いた日ごろの訓練の内容は想像を絶するものでありました。

一週間にも亘るサバイバル訓練は、草や木の根、野生のヘビなどの爬虫類を捕まえて生活するという過酷な訓練。もちろん女性隊員も同様の訓練をするそうで、そうした訓練をもってしても、東日本大震災復旧や、ハイチ地震支援等の海外貢献に於いては、それ以上の過酷な環境下での任務になるそうで、さらには、私も第一段階の訓練（地上１１㍍の高さからの降下訓練）を体験させて頂きましたが、最終段階では高度４,０００㍍から７０kg以上の装備を着用し、パラシュートでピンポイント地点への落下を行う空挺任務等、過酷極まりない訓練内容でした。

地方自治体と米軍の共存

在日米空軍横田基地視察で感銘を受けたのは、いかなる訓練をもってしても、現場で最も必要とされるのは、経験に基づく対応との事でした。

活動の主なものは、管轄するエリア内のヒトとモノの輸送と人道支援との事ですが、横田基地に所属する第３４７空輸隊の受け持つエリアは、米空軍が全世界を３つに分けている中で最も広く、いわゆる環太平洋地域ですが、その地域の空輸と人道支援を総括する司令部が横田基地に所属しています。

人道支援では、管轄内で被害が発生すれば、その被災地で必要とされる人的・物的支援について一括して派遣等を行うということで、東日本大震災で被災した仙台空港に於いても震災から５日後の3月１６日には空港としての機能を回復させて下さったとの事や、昨年フィリピンを襲った台風被害からの復旧支援では、大規模な作戦（ＤＡＭＡＹＡＮ作戦）を展開し、被災者からは大歓迎を受けたそうです。

横田基地の取組みで非常に関心を持ったものが、近隣自治体とのコミュニケーションでした。

自治体と米軍基地との共存とも言えると思いますが、５市１町に接する横田基地では地域間交流として、各自治体に友好クラブが組織され、それらクラブのカウンターパートとして基地内に存在する米軍部隊が個別に割り当てられ、自治体の運動会に於けるスポーツ交流等が盛んに行われ友好が保たれているとの事で、こうした事例は座間市に於いても導入が出来れば良いと感じた次第です。

また、横田基地に於いては約4,０００名の隊員がいるなか、４割程度が女性隊員との事（米空軍全体でも同様の比率との事）で、女性の採用・参画についても見習うべきと感じました。

自衛隊訓練を終え、終了証を頂きました！